



能楽師に おれはなる!

令和6年2月1日
第40号

西合志南小学校 学校だより 文責 田中 宏和
西南小の風
だれかのために じぶんのために いっしょうはんめい

自分が能楽師になる未来を描くことは、そうそうありません。現にさまざまな小学生のなりたい職業の調査結果を見て、そこには能楽師はおろか、歌舞伎俳優や狂言師、または落語家などおよそ日本の伝統芸能に携わる職業そのものがありません。小学生がなりたい職業の今の傾向は、男子がユーチューバー、スポーツ選手、女子が歌手・モデル、パティシエなどが上位です。逆に、親が子に望む職業の上位は公務員や会社員であり、親子の意識の数光年ほどの隔たりに、「親の心子知らず」はいつの時代も変わらぬいと改めて思いました。

また、本校図書館のなりたい職業関係の書籍を見てみましたが、そこにもほぼないのです。唯一掲載があったのは『新十三歳のハローワーク』です。能楽三役(ワキ方・囃子方・狂言方)が掲載されていました。約六〇〇ページの「新十三歳のハローワーク」です。能楽三役(ワキ方・囃子方・狂言方)が掲載されていました。約六〇〇ページの中の一〇行です。主役であるシテ方の掲載はありません。シテ方は一部世襲となっていることも掲載の理由がられません。しかし、今では修行をすれば宗家から免状が発給され、誰でもシテ方になれるようです。それに、歌舞伎をはじめとして日本の伝統芸能は女人禁制の印象がありますが、今は女性も能楽師になれます。

そもそも、私も含めて多くの日本人の大人が「能」を人に説明できるほどきちんと知りません。だから今回、能楽師の方による講話や実演を見る前に、「能について何か知っていることがある人？」と問うた際、子どもたちからの返事が「NO!」になったのは致し方ないことだと思えます。(言わせたのですが)

さて、今回本校にお見えになったのは、次のお二人です。

- ・ 武田友志 (たけだともゆき) さん
観世流 シテ方 能楽師
- ・ 飯富章宏 (いいとみあきひろ) さん
大蔵流 小鼓方 能楽師

武田さんは東京は中野に能楽堂をかまえる能楽師のご出身で、幼い頃から能楽師としての教えを受けてられた方です。様々な葛藤があったとは言われましたが、能楽の技術的・文化的財産を継承し守っておられます。飯富さんもまた能楽師のご出身ですが、生家は熊本市だそうです。若い時は能楽師になる気は全くないま、



ま東京の大学に進学されたそうですが、大学のサークルで能楽に改めて出会い、能楽師になられました。東京や福岡でご活躍後、現在は合志市にお住まいです。

お二人は平成二八年の熊本地震の時から、復興事業の一環として毎年各学校で公演されています。ボランティアです。今回は、もともと予定していた学校がインフルエンザで実施できなくなったために、急遽でしたがありがたいことも本校にお声かけいただいたのでした。

前半は能楽のことをかみ砕いて説明していただきました。能面を実際に見せていただいたり、シテ方・ワキ方・囃子方・狂言方など、能楽は役割による完全分業制ということなどの基本的なことです。能面はやはり食いつきが良く、若い女性の面はその角度で感情を表現するとか、般若の面も怖い形相だが実は女性であるとか、子どもたちは興味津々でした。実演では本来なら完全分業制ではありませんが、お二人なのでシテ方の武田さんがワキ方の声出しまでしながら演じられ、飯富さんの小気味良い小鼓の音や合いの手が入ります。体育館のフロアを三角コーンで六米四方に囲っているだけの舞台ではありませんが、そこはモップをかいた後は白足袋を履いた者以外は決して入ってはならない神聖な場所と言われました。お二人の実演からもその神聖さがよく伝わってきました。しんとしながら、子どもたちはじっと見入っているのです。また、体験もありました。「たあかあさあごおやあーこおのおうらあぶうねえに…」(高砂や この浦船に…)と、武田さんの発声の後に全員が続きます、それもいっしょい声で。実際すごく上手な子が何人もいて、感激されていました。端から見ても、子どもたち皆がいい顔をしていました。本物の芸術に触れて自分を重ねること、ものすごくワクワクできたと思います。それも芸術の良さですね。

最後に、今回の講演を聞いた五年生の姿勢に武田さん・飯富さんのお二人がたいそう喜ばれ、感心して帰られたことは私たち職員のとほりです。知らぬ間に人を喜ばせてしま、自慢の西南小児童です。

